

「地域学総説」の挑戦6

柳原邦光*

The Challenges of Teaching the Theory of Regional Sciences: Part VI

YANAGIHARA Kunimitsu*

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第8巻 第3号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.8 / No.3

平成24年3月30日発行 March 30, 2012

「地域学総説」の挑戦 6

柳原邦光*

The Challenges of Teaching the Theory of Regional Sciences: Part VI

YANAGIHARA Kunimitsu *

キーワード：歴史、歴史的視点、人と人との結びつき、気づき、

Key Words: history, historical point of view, social ties (sociabilité), awareness,

はじめに

地域学総説（地域学部3年生必修科目）には2つの目的がある。ひとつはこの授業を通して学生たちが地域学を深く理解し自分の言葉で語れるようになること、もうひとつはわたしたちの地域学の輪郭をはっきりさせること、すなわち、地域学を創ることである。いうまでもないことだが、これは教員だけの、学問領域内だけの知的営為ではない。地域学は生活の現場での多様な動きに真摯に学んで、自らのうちに吸収し、地域学として表現しなければならない。地域学は教員と学生と現場の実践者のコラボレーションから生まれるのである。わたしたちの試みはまだ6年間の歴史しかないが、その成果を2011年4月に『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす』¹として出版することができた。これによってわたしたちの地域学を世に問うたのである。

今年度の地域学総説では、『地域学入門』を活用して次のように授業を構造化した。全体を大きく2部構成にした。第1部で『地域学入門』のエッセンスである4つの視点²を「地域学の視点」として提示して、学生たちがどこにまなざしを向けて地域を考えるべきかを明示し、地域学についてまとまった理解に到達できるよう工夫した。その上で、第2部では、『地域学入門』で十分に論じ切れなかった問題領域を深く掘り下げることを試みた。2011年度のテーマは「歴史性とつながりの回復」である（詳しくは「2011年度授業計画」を参照）。このように2部構成としたのは「地域学を創る」プロセスを確立するためである。つまり、年度ごとに新たなテーマを設定して、その検討の成果を次年度の第1部に組み込む。そうすることで地域学を少しずつ充実・更新しながら、地域学の対象領域を拡大するとともに、いっそうの深化を図ろうというのである。

実際には構想通りに授業を進めることはできなかった。というのは、東日本大震災はわたしたちを根底から揺さぶり、地域学を再考するよう促したからである。わたしたちは『地域学入門』で今日わたしたちが直面しているさまざまな問題群を根源的に捉え直そうとした。それでも、大震災を経験して、何か足りない、そう思わざるをえなかった。それが何なのか、重い問いを受け止めき

*鳥取大学地域学部地域文化学科

¹ 柳原邦光／光多長温／家中茂／仲野誠編著『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす』、ミネルヴァ書房、2011年。各章は地域学部教員が担当し、講師としてお招きした実践者の方々にはコラムを執筆していただいた。

² 4つの視点とは、「地域を客観的・構造的に捉える視点」、「生活の視点」、「『わたし』からの視点」、「移動の視点」である。

れないままに授業に入った。筆者は報告するのが辛かった。報告した教員や講師の中には被災地に入った方もあって、心を大きく揺さぶられるなかで講義に臨まれたのではないだろうか。報告の多くが大震災に言及しているので、本稿でも紹介したいと考えたが、改めて録音を聴いてみると、それぞれの言葉は重く、簡潔に表現できるものではない。今回は断念せざるを得なかった。

そこで、第1部については『地域学入門』をご覧いただくとして、本稿では新たにテーマ設定した第2部の「歴史性かつながりの回復」に考察対象を限定して、そこから地域学が何を学ぶことができるかを以下の順で考えることにした。第1章では、講師としてお招きした実践者の方々の講演を、続いて第2章で歴史研究を専門とする学部教員2名の報告を紹介する。第3章では、第2部から地域学が何を学ぶことができるのかを検討する。最後に、「おわりに」で地域学の到達点と今後の課題について私見をごく簡単に述べる。この問題については、昨年12月10日に行われた第2回地域学研究会大会「地域学への期待と課題」³の成果を含めて別稿で詳しく論じることとする。

第1章 実践者の講演

最初に、なぜこのようなテーマを設定したのかを確認しておこう。筆者は、「地域学」は、誰もが「人として安心して幸福に生きていきたい」、あるいは内山節氏のように「安心と無事」「自分の存在の確かさ」を感じて生きたいという願いを前提にしていると考えている。別の表現をすれば、地域学は「生きるとはどういうことか」という問いを抱えている。今回のテーマを「つながりの回復」にしたのは、人はさまざまつながりがあってはじめて生きられるのであるが、今日では、それが失われるか、あまり感じられなくなっているのではないか、「生きづらさ」というとき、このような現実があるのではないか、と思ったからである。もちろん、つながりといってもさまざまある。そのなかで「歴史性」を選択したのは、わたしたちにとって特に欠けているのが歴史的感覚ではないか、人が生きるということと歴史性との関係をじっくり検討したい、と考えたからである。

予定した6名の講義を終えて、全体を振り返ってみると、設定されたテーマを超える豊かな成果があったように思われる。そこで「歴史性かつながりの回復」というテーマにとどまらず、「人が生きられるとはどういうことか」ということも含めて、第2部の成果を地域学に生かしたい。

(1) 「生きづらさ」に学ぶ

最初に、実際の報告順とは逆になるが、向谷地生良さん（ソーシャルワーカー、浦河べてるの家）の講演『自分自身で、共に』つながりを取り戻す—『個人苦』から『世界苦』へ—から始めよう。向谷地さんは統合失調症など精神障害を患った人たちに向き合ってきた。精神障害は「関係の病い」や「人づきあいに困難を生じさせる病い」といわれている。職場の人間関係だけでなく、家族との関係、さらには自分自身との関係にさえ躓いてしまい、結局、社会的規範に反する振る舞いをして、社会から孤立し、生きづらさを抱えてしまうのである。向谷地さんの取り組みで注目すべきは「当事者研究」である。筆者は次のように理解した。

当事者研究とは、自分自身を観察対象として、「自分で仲間と共に研究する」ことである。具体的には、同じような精神障害に苦しむ仲間やスタッフの前で、自分の精神状態、自分のなかで起こっ

³ 大会報告「地域学への期待と課題」を参照。

たことを言葉で表現し、それについて仲間から質問やアドバイスをもらう。そうすることで、自分の置かれた状態をできるだけ客観的に理解し、そこから、どう対処したらいいのかを仲間と共に考えるのである。これは自分の話をしっかり受けとめてくれる仲間の前で自らを語り意見交換することを通して、互いに理解し合い、つながっていくことでもある。

興味深いのは、当事者研究によって、自分の苦勞が自分だけのものではなく、万人の苦勞でもあると理解できるようになることだ。「個人苦から世界苦へ」というプロセスである。つまり、自分の苦勞への取り組みは、自分のためだけでなく、万人の苦勞を解決することにつながっている。自分を研究することで社会や地域に役立つことができるという感覚である。仲間と共に自分の苦勞に向き合い研究することによって、いわば社会=世界とつながり、貢献するのである。したがって、当事者研究は、自分自身を客観視するとともに、社会とつながって生きるための態度や作法だということになる。このことを向谷地さんは著書の中で次のように述べている。

当事者研究とは、生活のなかで起きてくる現実の課題に向き合う「態度」であり、「人とつながり」そのものであるといえます。……その積み重ねの中で、毎日の生活の中に「研究」の成果が根を下ろし、思わぬ形で具体的な生活課題の「解消」もはかられることで、現実が今より生きやすくなり、生活の質の向上につながります。⁴

向谷地さんには逆説的な表現が多いが、そのひとつに「病むことを通して人間の希望が語られていく。人間が病むということは一つの希望ではないのか」という言葉がある。これについて、向谷地さんは次のように述べている。精神障害を患った人たちは「見えない危機」を危機として感じ、それを身体や思考の混乱という形で伝えようとしているのではないか。このメッセージを受けとめ解明して、暮らしやまちづくりに活かしていくことが必要だ。そうしないと立ち行かなくなる。向谷地さんはこのことを著書のなかでさらに詳しく説明している。

この二十八年間を貫いてきた思いはただひとつ、「障害を抱える当事者の体験のなかには地域社会が学ぶべき有用な生活情報、地域の再生に向けた知恵が集積されている」という実感であった。当事者は、みじめな存在である前に、尊重されなければいけない有用な存在なのである。地域は、障害を体験した市民の経験を通じて、地域社会を変革していくことができる。⁵

「弱さの情報公開」が、地域のなかで生き抜く大切な条件となるのです。……「弱さ」という情報は、公開されることによって、人をつなぎ、助け合いをその場にもたらしめます。その意味で、「弱さの情報公開」は、連携やネットワークの基本となるものです。それをプライバシーとして秘匿してしまうことによって、人はつながることを止め、孤立し、反面、生きづらさが増すのです。⁶

わたしはとても大切な生活情報の一つとして、当事者の体験を聞いてきました。とても私だけが聞いておくのにはもったいない貴重な生活情報、つまり、生きること、暮らす上でのたくさ

⁴ 向谷地生良、浦河べてるの家『安心して絶望できる人生』（NHK出版、2006年）、54頁。

⁵ 向谷地生良『「べてるの家」から吹く風』（いのちのことば社、2006年）、167頁。

⁶ 『安心して絶望できる人生』、27頁。

んの知恵が詰まっている。……閉ざそうとするのではなく、とても大切な市民の情報の一つとしてお互いに伝え合う、……自分達の大切な経験と知恵を、専門家の手から取り戻すことが大切になってきます。……浦河で大切にしてきたことは、あなた達の中に知恵がある、その知恵を伝え合う。そこから場全体が豊かさを取り戻すということです。⁷

ここで提示されているのは、自らの弱さを認めながらも、一人ひとりのなかに知恵があることを認め、それを互いに伝え合い活かし合って生きる人間像である。このような人間理解から生まれる地域や社会への期待である。これは自立=自律した個人という主体的で強い人間像から構成される近代社会像とは対照的で、大いに反省を迫るものだ。「人間が病むということは一つの希望ではないのか」という向谷地さんの言葉は、地域学にとってきわめて重要な示唆を与えているのではないだろうか。問題を引き受け、真摯に向き合うことから地域における人の生は豊かになっていくのであろう。

(2) 「生きる力」を取り戻す

次に、吉本哲郎さん（地元学ネットワーク主宰）の「地元学―足元をみつめてつながりを取り戻す―」について考える。吉本さんにもインパクトのある言葉がたくさんある。たとえば、冒頭での、杉本栄子さんの「人様は変えられないから自分が変わる」。この言葉を受けた「世間は変えられないから、水俣が変わる」「あきらめろ、覚悟せよ、本物をつくれ」である。なぜ吉本さんはこのようなことをいわれたのだろうか。筆者は次のように理解した。

なぜ水俣が変わらなければならないのか。それは水俣そのものに問題があるからだ。有機水銀によって環境が汚染され、人命が失われ、大きな健康被害を出した。汚染源と汚染物質を除去し、環境を再生しなければならない。水俣病をめぐって人と人との関係も破壊された。「もやい直し」をして、人と人との結びつきを取り戻さなければならない。それだけではない。水俣はいわば「国の縮図」である。水俣はチツソに代表されるように近代化・工業化・経済発展によって豊かな生活を実現しようとしてきた。しかし、その結果、環境のほかにも、大事なものを失った。この事実を受け入れ、失ったものを取り戻さなければならない。覚悟を決めて、本物をつくらなければならない。

それでは、失ったものとは何なのか。失ったものを取り戻すには、どうしたらいいのだろうか。本物とは何なのか。吉本さんにとって問題は、生活を巨大なシステムに委ねてしまったことだ。ここから、生活を見直さなければならない。自分たちの生活を人任せにせず、自分たちでつくっていかなければならない、という認識が出てくる。

吉本さんは『地元学をはじめよう』（岩波書店、2008年）という本の中で、若い女性の言葉を引用して、失ったものが何かを説明されている。とてもいい文章なので、少し長いが引用しよう。

近代化のなかで、おたがい顔の見えない関係の中でのものやサービスや情報とお金やりとりされるようになり、暮らしは豊かで便利になった反面、人々が失ってきたものがある。それは一言で言えば「生きる力」だと思う。「生きる力」は、人間が生きていくうえでけって欠かすことのできない水と食べ物を確保し、道具や家など必要なものをつくり、支えあって生きてい

⁷ 前掲書 38-39 頁。

く人間関係を築いていくことだと思う。それは、自然や人と人とのさまざまな関係を紡ぎだし、自分の頭や身体を使って知恵や技を磨き、それを受け継いでいくことでもある。

自分たちの生きる基盤を他人まかせにすることは、自身の「生きる力」を失っていくことであり、さまざまな（決定や物をつくる）過程がわかりにくいものになっていくことでもある。そのことによって、「安全」や「安心」、ひいては自らの生きがい何なのかもわからなくなり、精神や身体の健康にもさまざまな影響が及んでくる。（中略）

豊かさや深い関係のある生産のもつ強さを考え、……これから私は、味がある、健康である、楽しむことを大切にしたい生産に関わっていく。自分につながる自然や人との関係を大切にすることから、自分も大切にしたい「地についた生き方」をしていきたい。（松本里美さん、204-205頁）

生産に関わる生き方をだれもができるわけではないかもしれないが、筆者は松本さんの文章に深く納得した。同じようなことを感じていたからである。

吉本さんは、「つくる暮らしへの回帰」を主張されている。何もつくり、買う暮らしでは、お金が豊かさのモノサシになってしまう。「つくることの省略」によって、人とモノとの距離、人と自然との距離が遠くなってしまふ。いい町の条件は、自然と生産と暮らしがつながっていて、つねに新しいものをつくる力のある地域である。「つくる力」の衰退は「考える力」の衰退であり、「調べる力」の衰退である。

これは深刻な事態である。それで、吉本地元学は、「自分たちで、調べ、考え、つくる」ことから出発する。重要なのは愚痴から自治への転換である。「ないものねだり」をやめて、自分たちで「あるもの探し」を始めることだ。「知の植民地」になってはならない。調べた人しか詳しくならない、下手でもいいから自分達で調べよう、現場は完璧でなくてもいいのだ。最初にするのは「足元にあるものを調べる」ことである。たとえば、「川の樹」の作成である。川を中心に水の流れを調べて流域のつながりを「見える化」するのである。この水の経路図が象徴しているように、暮らしの根本に関わる場所から調べるプロセスのなかで、人は地域の自然と過去（歴史）に向き合うことになる。暮らしの成り立ちを調べるのであるから、当然、そういうことになる。こうして、地域のもっている力、人のもっている力が引き出されてくる。もう一つ重要なことは、あるものとあるものとを組み合わせ、新しいものをつくっていくことである。新しいものをつくっていないところは、企業もお店も商店街も行政も衰退してしまうからである。

興味深いことに、地元学に関わるなかで、人はあるがままの自分をそのままあるものとして見ていき、自分のもっている力に気づいていくという。つまり、地元学とはポジショニングのことで、自分がどこにいるかわかるから、自分が見えてくる。やることも見えてくるから、自信がついてくる。それはここで生きていく勇気と希望をつくることになる、と吉本さんはいふ。

以上から、吉本地元学のエッセンスを次の3点にまとめることができる。ひとつは、システムに依存した生活をするなかで自分と自然やモノや人との間にできてしまった大きな隔たりに気づき、これを埋めるべく努力すること。換言すれば、「自分たちで、調べ、考え、つくる」というプロセスを生活のなかにもつことである。二つ目は、足元を見つめ、あるもの探しをすることで、さまざまなつながりや関係のなかにある自分自身に気づくこと、自分のポジションを確認すること。つまり、自分を客観視できるようになることである。最後に、こうして、人は生きていく勇気と希望をもつことができる、ということである。

(3) 「歴史が降り積もっているところで暮らすことは、生を豊かにしてくれる」

今度は森まゆみさん（作家、市民文化活動家）の「まちの暮らしに生きる歴史をみつめて—『谷根千』の実践から—」である。著書である『〈谷根千〉の冒険』（2002年、筑摩書房）を参考にしながら、森さんの活動について考えてみよう。

最初に確認すべきは、地域雑誌『谷根千』が対象にしている「町」（谷中・根津・千駄木）は、行政単位ではなくて、生活実感から「自分たちの町」だと感じることでできる生活圏だということである。いわば「生きられた地域」である。この町は谷中墓地を中心に江戸開府以来のお寺や古い建物なども多く、多数の文人や貴重な手仕事の職人が暮らしてきたところである。ここには普通の人たちの暮らしの記憶、生活文化や知恵が比較的よく残っている。

森さんは次のようにいう。さまざまな人々の人生や思い出がしみついた建物や風景をみると、長い暮らしの連続性と、土地や人との関わりのなかで自分が「生かされている」と感じる。そして、この原風景が「心の落ち着き」と「癒し」を与えてくれる。このことを、講義では、「歴史が降り積もっているところで暮らすことは、生を豊かにしてくれる」と表現された。この言葉は歴史性が人の生にとってもつ意味を見事に表現している。

とはいえ、町も人の暮らしも、時とともに緩やかに、あるいは急激に変っていく。何もしなければ、歴史をつくりあげてきた人々の人生や暮らしの細部はいつのまにかわからなくなってしまう。記録されないものは記憶されない。誰かが聞き書きし記録していかないと「なかったこと」になってしまうのである。

そういう意味で『谷根千』の果たしてきた役割は、少なくとも3つあると思われる。ひとつは、住民の暮らしと生、すなわち、「普通の人の生き死に」とその積み重なりを住民自身の語る言葉を通して見えるようにし記録することで、町の生きた記憶として伝えていったこと。2つ目は、『谷根千』自らが、地域の人々が互いの経験や思いを知り、町で起きている問題を語り合うことのできる「広場」（水平のコミュニケーションの場）になったこと。3つ目が、住民が今あるもの（歴史的・文化的遺産）を見つめ、自覚し、それを活かして、生き生きした町をつくることを可能にする「媒介者」になったこと、である。

『谷根千』の活動からいえるのは、町の暮らしをつくってきたものや暮らしの細部を知ること、さらに多様な人々と関わることを通して、人と人、人と過去の人々、人と土地とのつながりを感じ取り自分のものにすることができるといえることである。いわば、歴史のなかに生きるのである。こうして、人の生が厚みをもった確かなものになる。また、多様な人々の暮らしと土地の記憶をひとつひとつ丁寧に掘り起こすことで、さまざまなつながりを目に見えるようにするとともに、新たなつながりをつくることにもなる。こうした多様なつながりの存在がこの町の強さであり、それが講義後半で紹介された東日本大震災への迅速な対応にも現れているように思われる。

(4) 「確かな関係の再構築」

講師の最後に紹介するのは内山節さん（哲学者、立教大学教授）の『『里』（ローカリティ）の思想と歴史性』である。そのエッセンスは「確かな関係の再構築」という言葉で表現できるだろう。

内山さんは講演の冒頭で、宮城県気仙沼市でカキ養殖をしている畠山重篤さんの「それでも海を信じ、海とともに生きる」という言葉を紹介された。内山さんによれば、畠山さんは漁師であるが、「森は海の恋人」という言葉を掲げて、仲間とともに山に落葉広葉樹を植える活動をしてきた。森

と川と海は一体的な世界であり、よい森とよい川が漁場としても豊かな海をつくっていくと考えたからだという。ところが、大震災と津波で母親と仲間を失い、集落も消えてしまった。カキ養殖の関連施設を破壊され、所有していた船も失った。これは大変な打撃でありショックだったはずである。知性で判断すれば、事態を受け止めることは難しい。ところが、畠山さんは震災後数日して「それでも海を信じ、海とともに生きる」というメッセージを出されたという。どうしてそんなことができたのだろうか。

内山さんは、「津波との間に魂の次元で折り合いが合ったのだろう」という。「ここには確かな関係の中で生きてきた人の力強さ、身体で知っている確かさがある。身体は確かな自然を見ていて、やっつけられるという確信をもっている」。つまり、津波と折り合いをつけることを可能にしたのは、知性ではなくて、長年にわたる自然との関わりあいの中で、身体で受け止めて学んできたことだ。「確かさ」や「確かな関係」は、自然と向き合いながら身体を使って生活することを通して獲得されたというのである。

大震災からの復興についても、「確かな関係」について重要な指摘があった。復興とは、胸のなかにあることを話せることではないか。「ここで生活できてよかったなあ」と思って死ぬることではないか。復興のグランド・デザインは「文学的」に語ることだ。「思想的」とか「文化的」といってもいい。地元の人が語り合えば、こういう町だというイメージができる。次にそれを具体的につくるにはどうすればいいのか、という段階に進む。復興はこのようにして「確かな関係」を再構築していくことである。

「確かな関係」は日本の伝統的な社会観のところでも説明された。日本の伝統的な社会は自然と人間の社会である。自然は死者たちとともに人間と同格のメンバーである。「自然」と「死者」と「生きている人間」で作っているのが日本の社会である。決して意見を述べることのない構成メンバーの意思を反映しながら人は自治をするのであり、生きている人間たちだけの論理で物事を決めるのではない、という。

死者たちの創った世界が消えていないことは、群馬県上野村の1000年の歴史をもつ畑や150体もの石仏を例にして説明された。これは村の豊かさである。死者たちのつくった世界は消えていない。わたしたちはその上で、そのおかげで生きている。死者たちの思いを受けながら社会をつくっていく。自然と人間の社会をどう復興させるのか、生きている人間と死者とを結ぶ社会をどうつくっていくのか。これを出発点として、生きている人間が生きられる社会をつくることが重要だ。

このような世界を内山さんは「里」や「コミュニティ」という言葉で表現されているが、それ自体が関係性の中にある。コミュニティは中にいる人だけで頑張っても力強くはならない。外にいる人たちとつながっていかないと強くならない。外にいる人たちと相互の関係をつくりながらコミュニティを守る。地域を復興させるのは内部の人たちが出発点だが、外部とのつながりも必要だ、というのである。

最後に、「システムが主体になった時代から、『確かな関係』が主体になる時代へ」という内山さんの主張に触れておかねばならない。福島原発の問題によってあらわになったのは、わたしたちの現在の暮らしが文明の生み出した巨大システムに支えられていること、このシステムはあまりに巨大化・複雑化してしまい、生活する普通の人々の手に負えないもの、責任の果たしようのないものになっている、ということである。わたしたちは「確かな関係」の対極にある文明=巨大システムと

どのように向き合うかという問いを突きつけられているのである。⁸

内山さんの講義を聴いて思うのは、わたしたちが自然と人間との関係に、両者の間で歴史的に長期にわたって結ばれてきた関係⁹にしっかりと目を向けなければならないということである。「生きている人間たちだけの論理で物事を決めてはいけない」という内山さんの言葉は重く、わたしたちに内省を促している。

第2章 歴史研究者の報告

(1) 「地域」の危機を歴史から考える

次に岸本覚さん（日本近世・近代史、地域学部地域文化学科准教授）の「地域意識と歴史性—日本史の事例から—」を紹介しよう。ここで設定された問題は、「過去において地域は災害などの危機にどのように向き合ってきたのか」である。この問題は次の2つの関係を中心に検討された。①地域における自然と人間との関係、②生活回復の中に見えてくる土地と住民との関係である。

危機として取り上げられたのは、明治（1896年）と昭和（1933年）の二つの三陸地震津波である。震災への人々の反応を通して自然観・災害観の変化（①の関係）が、そして地域の復旧・復興の動きから②の関係が検討された。以下がその概要である。

最初に、自然観・災害観について。近世の場合、自然と戦ってなんとしても生活を守るというよりも、自然が克服できないことを受け容れて、その範囲内で対策を講じている。しかし、明治と昭和に大規模な地震津波を経験して認識に変化が生じる。内務省や文部省の資料に被害への対応を国家的な課題とする見方が現れるとともに、防災対策の無さを問題視し、科学技術によって災害の惨禍を軽減・防止しようとする強い意識が現れる。また、震災後に建立された石碑の碑文から、被災地域の人々の意識の変化がわかる。知恵を働かせて惨禍をできるだけ小さくしようとしているのである。明治の場合、石碑は死者を供養するためのものだったが、昭和の石碑は、「地震があったら津波の用心」、「津波があったら高いところへ逃げよ」、「此処より下に家を建てるな」などとあるように、防災・減災のためなのである。

次に土地と住民との関係について。津波の被害を完全回避するには高所移転しかない。しかしながら、明治以前には集落移動の事実は確認されていない。明治津波を経験して、災害予防法として高所移転が認識されるようになったものの、実現は難しかった。義捐金を使って集落を移動させた例もあるが、結局、元の場所に戻ってしまい、昭和津波で大きな犠牲を出している。なぜ住民は土地にこだわるのか。これについては生活上の必要性が指摘されている。漁業や海運業で生活する以上、海から離れるわけにはいかないのである。この事情は震災津波被害に限らない。火山噴火で地域が壊滅状態になった場合も、江戸期を含めて、結婚・養子縁組や救済金の受給方法など知恵を働かせ、さまざまな手段を使って元の場所に「家」と「村」を再建している。ともに生活に欠かすことのできない単位だからである。こうした生活回復過程に、住民と土地との切り離すことのできない関係と、生活再建を可能にする地域の強靱な回復力とをみることができるといえる。

講義では、自然と人間との関係と、土地と人間との関係という2つの関係の歴史的变化が検討された。前者の関係の場合、国家レベルの言説では、人間の意思と科学の力によって自然の脅威を克

⁸ 詳しくは内山節『文明の災禍』、新潮社、2011年を参照。

⁹ この問題については、内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』（講談社、2007年）を参照。ここでは「見えない歴史」「知性ではとらえられない生命の歴史」が語られている。

服しようとする姿勢が顕著である。これは江戸期の為政者の態度と比べれば、大きな変化（「断絶」）である。

石碑からは住民の意識にも変化が見られる。ただ、住民はもっと謙虚である。生きのびるためにどう行動すべきかをシンプルに表現している。要するに、うまく津波から逃げようというのである。これは小さな、しかし、重要な工夫である。配布された資料によれば、石碑の多くは朝日新聞社が読者から募った義捐金で建立されたという。石碑の立つ場所が津波の浸水位置を示していることをあわせて考えると、石碑に見られる住民意識の変化は、震災を機会として生まれたさまざまな交流の結果なのかもしれない。

二つ目の土地と人間の関係の場合、明治の震災後、確かに一旦は高所移転するなど、近世にはない行動がみられるが、結局は元の場所に戻っているように、高所移転の実現の難しさが指摘されている。昭和の震災後に高所移転した例もあるので、歴史学としては詳細な調査が必要だが、壊滅的な被害にあってもなお同じ土地で暮らし続けようとする断乎たる意思是、歴史的に連続するもの（「持続」）とみるべきであろう。

講義で検討された2つの関係を通じていえるのは、地域住民の場合、何より重要なのは日々を生きていくこと、生活していくことであって、これこそが判断や行動の前提になっていると思われることである。高所移転という考えは論理的には当然のことにように思えるが、その土地で生活しなければならぬ住民から見れば、そうとばかりはいえないのである。自然に向き合う態度も単純ではない。自然は時に耐え難いほどの惨禍をもたらすが、それでも日々の命の糧を提供してくれるものでもある。脅威をもたらすからといって、スパッと縁を切ってすますわけにはいかないのである。人は自然との間にこのような微妙な関係を生きてきたのである。

(2) 柳原邦光 「歴史的に考えるということ」

最後に筆者の講義「なぜ歴史性なのか—フランス史の事例から—」である。なぜこのタイトルにしたのかといえば、学生達から「歴史が地域学とどのように結びつくかわからない」という発言をしばしば耳にしたからである。フランス近代史を専門とする筆者には驚きの発言といわざるをえないが、学生達の率直な疑問であろうから、この問いかけにフランス史研究から優れたものをいくつか紹介することで応えたいと思ったのである（このように地域学総説では学生の感想や意見が地域学を構築するときの重要なヒントになっている）。そこで生活や文化に関わる研究をいくつか選んで紹介した。詳述はできないので、筆者の講義の要点のみを紹介することにしよう。

最初に取り上げたのは、主に18世紀フランスの都市の街区、小さな町や村の民衆世界を描いた研究である¹⁰。これらの研究から次のようにいうことができる。人々は日々繰り返される具体的な生活を通してさまざまな約束事や知恵、生きていくときの根っこになるものを身につけた。人々の判断の基準や振る舞い方をつくりあげていたのは、伝統的な生活の仕方と文化的な枠組みであり、人々にとっていわば「聖なるもの」であった。しかしながら、この枠組みも不変というわけではない。たとえば、フランス革命期に「聖なるもの」が抑圧されたとき、人々は革命の理念を伝統に基づいて解釈し利用して「聖なるもの」をとりもどそうとした。革命の理念を独自の仕方でも受容しつつ生活のなかに新たな局面を切り開いて、人々は自己変革を遂げていったのである。

¹⁰ Suzanne Desan, *Reclaiming the Sacred: Lay Religion and Popular Politics in Revolutionary France*, New York, 1990.

ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』、岩波書店、1986年、船曳由美『100年前の女の子』、講談社、2010年。

次に紹介したのはフェルナン・ブローデルの『地中海』である¹¹。この作品には重要な点が多々あるが、講義で強調したのは、ブローデルが現在と過去との関係を3層の時間の織りなす関係として描いたことである。この研究は「歴史性とながら」を考えるととききわめて重要な研究なので、少し詳しく紹介しよう。

ブローデルは、地中海という大きな空間を国境など関係なしに「共通の生命を生きているひとつのまとまり」だと考え、それを総体的に捉えようと試みた。このとき着目したのが、ものごとが続いていく時間の長さ、「持続」（「波動」）である。この時間は次の3つからなる。まずは「長期持続」（「長期波動」）である。この時間層は変化の乏しい、あるいは変化にきわめて長い時間がかかる波動で、「人間を取り囲む環境と人間との関係の歴史」、「ゆっくりと流れ、ゆっくりと変化し……絶えず循環しているような歴史」である。つまり、地理的・生態学的環境と、その中で営まれる、ほとんど変化のない生活様式である。次にくるのが「中期持続」（「中期波動」）で、10年とか20年、あるいは50年といった周期で変化するものである。「ほとんど不変ともいえるべき地理的現実」の上で展開される、緩慢なリズムをもった社会の歴史、さまざまな人間集団の歴史、経済や社会の緩やかに変化する歴史である。3つめの時間層が日々生起するさまざまな出来事からなる「個人の次元の歴史」、「事件史」、短い時間でめまぐるしく変化する「短期持続」と呼ばれる時間の層である。ブローデルはこの3つの長さの波動の関係として、16世紀後半の地中海世界という「現在」を「全体的に」捉えようとしたのである。

しかしながら、ブローデルが最も重視したのは「長期持続」である。ブローデルは長期持続とほぼ同じものを「構造」という言葉で語っている。「構造」とは、「事件、出来事といった表層の歴史の底にある『恒久的なもの、動かないもの、反復されるもの』、歴史の深層においてほとんど変わらないものである。3層の時間の中で目を向けるべきは、生活や行動、ものの考え方や感じ方（心性）を長期にわたって枠づけているもの、支えたり制約したりしている「構造」なのである。ブローデルはこれを「深層の歴史」と表現している。

この見方によれば「現在」はいつくもの時間層の織り成すものであり、人はさまざまな過去と複雑な関係を持ちながら「現在」を生きていることになる。そうだとすれば、この関係に目を向けて、地域とそこで営まれるわたしたちの生とを考えなければならない。

3つめは、村や町での伝統的な生活とフランス革命という巨大な政治的事件との出会いをテーマとする研究である¹²。問題は長期持続と「事件」（短期持続）との関係である。結論のみを記せば次のようになる。革命前にカトリック教会の聖職者は教区の生活において中心的な位置にあった。教区の教会は人と人とを結ぶ社会的結合の場であると同時に、もっと大きな外部世界につながる社会統合の場（フランス全体に共通するカトリック信仰と政治的イメージが獲得される場）でもあった。この場において聖職者は要の位置にあったが、フランス革命は聖職者を直撃することで教区の生活を根底から揺さぶった。革命をどう受けとめるか、受容するか否かを左右したのは、ひとつには革命以前に聖職者と教区住民との間で長期的に形成されてきた宗教的、文化的、社会的関係である。

¹¹ フェルナン・ブローデル『地中海』（全4巻、藤原書店、1991-1994年。『地中海』に関する記述は、ブローデルの『地中海』のほかに、次の文献に依拠している。二宮宏之『歴史学再考—生活世界から権力秩序へ—』（日本エディタースクール出版部、1994年）、川勝平太編『海から見た歴史』（藤原書店、1996年）、浜名優美『ブローデル『地中海入門』』（藤原書店、2000年）、竹岡敬温『アナール学派と社会史—「新しい歴史」へ向かって』（同文館、1990年）。

¹² T. Tackett, *Religion, Revolution, and Regional Culture in the 18th century France*, Princeton, 1986., Michel Vovelle, *La Révolution française 1789-1799*, Paris, 1992.

革命期に政治化が著しく進むなかで、革命への反応を通して（文化的な選択の結果）、政治的・宗教的文化を異にする地域文化（「2つのフランス」）が生まれ、20世紀に至るまで存続することになった。つまり、革命以前の、主に宗教文化的な「構造」がフランス革命という「事件」に遭遇して、政治的・宗教文化的な「新たな構造」に変容していったのである。日常生活はナショナルな政治的事件と出合うことで決定的に変容することもあるのである。

最後に紹介したのは、生活史と近代世界システムとの関係史である。「近代世界システム論」はイマニュエル・ウォーラステインが唱えたもので、近代の世界をひとつのまとまりをもったシステム、巨大な経済的分業体制として、その成長・発展を見ていこうとするものである。国との関係でいえば、歴史は国を単位として動くのではなく、すべての国の動向は「一体としての世界」、つまり世界システムの一部だと考えるものである。ここでは川北稔さんの研究を紹介した¹³。というのは、庶民の生活感覚に根ざした問題に目を向けて、具体的な生活のあり方と世界的なつながりとの関係を視野に入れた研究だからである。たとえば、16世紀以降、紅茶やコーヒー、砂糖などの植民地物産がイギリスの人々の日常生活に入るようになり、生活文化が大きく変化していくのであるが、川北さんはこの変化の背景に何があったのかという問題提起から始めて、世界システムにおけるイギリスの位置の変化、産業革命を可能にした諸条件、ジェントルマン支配の存続といった大問題を検討されたのである。筆者にとって興味深いのは、生活のなかで生じた変化に着目し、それを世界システムという大きな関係性のなかに位置づけて、イギリス社会のありよう、その連続性と歴史的变化とを解明しようとした点である。一国の範囲内で考える場合と、世界システムから見たときでは、ものの見え方がまったく違うのである。この視点は地域学にとってきわめて重要である。

以上が筆者の講義の概要である。全体を通して伝えたかったのは次の2点である。ひとつは、人の生が分厚い過去の堆積の上にあるということである。人はさまざまな過去と否応なくつながっていて、過去から生きていくためのベースになるものを獲得している。それは人の生が支えられると同時に制約されてもいるということでもある。このことを認めて、過去を尊重し、しっかり向き合っ、過去との複雑で微妙な関係を知る努力をしなければならない。そうすることで、わたしたちの生を過去に向かって、同時に未来に向かって、広げることができるのである。

もうひとつは、さまざまな関係性を捉えようとするまなざしの重要性である。人の暮らしの場は狭いように見えるが、決してそうではない。もっと大きな空間にあるものとつながっていて、深い影響関係にある。この関係性を捉える努力をすることもまた、わたしたちの生を広げ豊かにすることになるだろう。

第3章 第2部「歴史性とながりの回復」の成果

最初に講師の講演から考えよう。向谷地さんの講演では、「関係の病」を患った人たちが「自分自身で仲間とともに」苦しみに向き合い研究すること（当事者研究）を通して、「個人苦」が「世界苦」でもあることに気づき、つながりをとりもどしていく試みが紹介された。「個人苦」が「世界苦」であり、「障害を抱える当事者の体験のなかには地域社会が学ぶべき有用な生活情報、地域の再生に向けた知恵が集積されている」、「地域は、障害を体験した市民の経験を通じて、地域社会を変革して

¹³ 川北稔『ヨーロッパと近代世界』、放送大学教育振興会、1997年、同『砂糖の世界史』、岩波書店（岩波ジュニア新書）、1996年、同『イギリス近代史講義』、講談社現代新書、2010年、角山栄・村岡健次・川北稔『生活の世界史10 産業革命と民衆』、河出書房新社、1975年。

いくことができる」という指摘は、彼らの苦労がわたしたちの社会の生きにくさ、「見えない危機」を如実に示しているということである。それはまた、わたしたちが人と人との関係、つながりなくしては生きられないということでもある。だからこそ、この危機にしっかりと向き合うことで人の生と地域は豊かになるのである。この意味で、まさしく危機は希望につながっている。

危機は吉本さんの講義でも指摘された。吉本さんは巨大システムに身をゆだねる生活から「つくる暮らしへの回帰」を主張されている。というのは、「つくることの省略」によって人とモノとの距離、人と自然との距離が大きくなり、さまざまなつながりを見失い、「生きる力」を失ってしまった、と考えているからである。失ったものを取り戻すために、吉本さんもまた「足元にあるもの」を「自分たちで、調べ、考え、つくる」ことから出発する。自分の足で仲間とともに調べ、考え、新しいものをつくっていく。そうした営みを通して自分がさまざまなつながりや関係のなかにあることに気づき、知恵を働かせ、生きていく勇気と希望をもつことができるというのである。

つながりの重要性は、『谷根千』の活動を通して町の暮らしの細部を掘り起こしてこられた森さんも指摘されている。森さんは「歴史が降り積もっているところで暮らすことは、生を豊かにしてくれる」という言葉で、自分自身を超えた、永続的な何かとつながっているという感覚が人の生にとって欠かすことのできないものであることを見事に表現された。

講師の方々のお話は、内山さんの「確かな関係の再構築」という言葉に集約されると思われる。「関係」は「つながり」に置き換えることができる。さまざまな「関係」や「つながり」とは何なのか、それが人の生にとってどのような意味をもっているのかをわたしたちは講師の方々から学ぶことができた。それは今を生きる人と人とのつながりだけではない。なかでも「自然と人間との関係」は重要である。人間がすべてである、すべてに優先するという考え方（人間中心主義）は見直さなければならない。

今回のテーマである歴史性もまたつながりを考えるとき常に視野に入れておくべきものである。人はすべて生活者である。生活者にとって必要なのは国家や国民の歴史だけではない。足元の歴史、生活の場の歴史こそが重要である。それは自然や過去の世界、過去の人々との深いつながり、生活の根底にあるものを感じ取ることでできる「気づき」としての歴史である。自らをよく知るための歴史である。「確かな関係」を再構築するためには、「現在」を見るだけでは十分とはいえない。わたしたちは「現在」を超えた大きなつながりのなかで在る。生きている人間がすべてではないのである。ローカルな歴史はまたある種の普遍的な歴史にもつながっている¹⁴。こうしたことに気づくこと、それを日々実感できる暮らしの場が必要である。わたしたちの生にとって歴史性は欠かすことのできないものである。

講師の方々のお話を通して筆者が理解したのは、以上のことを含めて、自分と自分達のもっているものを信じて、足元から「関係」や「つながり」をしっかりとみつめ、他の人々とともに「確かな関係」を再構築していくことである。それが生きていくための「確かな希望」になるということである。

ところで、歴史研究者である岸本さんと筆者の場合、経験豊かな実践者である講師とは立場が異なることを認めざるを得ない。講師の方々にはみな長きにわたる現場での実践を通して、いわば当事者として思索を深め経験を思想に昇華された方々である。わたしたち2人はそうではない。確かに人々の生活に着目してはいる。しかし、それはあくまで第三者としてであって、当事者ではない。

¹⁴ 内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』を参照。

わたしたちは検討対象の外に身をおいており、対象との間には距離がある。わたしたちが歴史を研究し語るとき、そういう前提に立っている。

わたしたちの話に共通しているのは、「わたしのいま、ここ」と過去との関係は複雑なものだという認識である。たとえば、岸本さんの講義では、地域における自然と人間との関係、生活回復の中に見えてくる土地と住民との関係が検討されたが、一つ目の関係については人々の意識に大きな変化がみられた。歴史学ではこのような変化を「断絶」という。しかし、生活回復過程における土地と住民との関係については、むしろ「連続性」を確認することができた。たとえ地震津波や噴火にあつて悲惨な経験をしても住んでいた土地を離れようとはしないのである。この場合、過去は持続している。

このように過去は現在と常に同じ関係をもっているわけではない。過去の持続する時間の長さの違いを筆者はブローデルの長期持続・中期持続・短期持続の概念を使って説明したが、それはふだんほとんど意識することのない、このような過去と現在との複雑で微妙な関係を目を向けることの必要性を伝えなかったからである。また、フランス革命史研究や世界システム論を紹介して、生活史から始めて地域が複雑な関係性のなかにあることにも言及した。ローカルな生活の場は小さいかもしれないが、同時に大きな関係性の中にある。この関係性とその歴史的变化を見ることも重要だと考えるからである。わたしたちの生のありようを深く理解するにはこのような見方も欠かせないのである。

講師の方々とわたしたち教員では立場もアプローチも異なるが、互いに補い合つて「確かな関係の再構築」に貢献したいと考えている。

おわりに

6年目の地域学総説を終えて改めて筆者が思うのは、地域学総説という授業がさまざまな経験や知が出合う場となっていることである。たとえば、わたしたち教員は学生に講義する立場である。それぞれの専門から人の生や地域について語るのであるが、同時に学生たちから学んでいる。時代の最前線にいる学生たちには敏感なセンサーがある。学生たちの反応に心を開き内省しながら、教員もまた思索を深めることができるのである。また、講師の方々のお話に教員も学生も実に多くを学んでいる。長期間にわたる実践経験の蓄積が人の生にとって何が重要なのかを力強く語り、聴く者に生きる覚悟とでもいうべきものを芽生えさせる。わたしたちの受けとめ方はまた講師の方々に勇気づけてもいるようである。地域学はこのような三者の響き合う関係のなかから創出されるのであろう。

地域学総説で検討すべき課題は数多あり、まだほとんど手付かずの状態である。これまでの歩みを振り返ってみれば、最も重要な検討課題のひとつは、自分の立つべき位置はどこなのか、まなざしをどこに向けるべきか、ということだった。わたしたちが学んだのは、目を向けるべきは、まずは自分の足元であり、そこからまなざしを広げて、さまざまな「つながり」や「関係」を捉えようということである。自分の足元、すなわち、自分自身を、自分の育ってきたところを、生活しているところを、よく見て、そこを足場として、生活する当事者として、考えよう。同時に、生活の場を枠づけている大きな構造や関係性を客観的に捉える努力をしよう。そうすることで、人として生きていくために必要な「つながり」や「関係」を確認し、取り戻して、「確かな関係」を再構築することになるのではないか。それが「自分の存在の確かさ」を感じて生きることになるのではないか。

「生の充実」、「わたしの幸福」と「わたしたちの幸福」に至る道筋ではないか、ということである。これはきわめて重要な「気づき」である。

わたしたちはまた、地域を捉える視点を探してきた。視点とは、一人ひとりの「生の充実」、「わたしの幸福」と「わたしたちの幸福」、言い換えれば「誰もが生きやすい状態」を実現しようとするとき、どこに立って、何を見据えながら考えるか、ということである。これまで確認できたのは5つの視点である。「〈わたし〉からの視点」、「生活からの視点」、「移動の視点」、「客観的・構造的視点」、そして今年度の「歴史的視点」である。5つの視点はさまざまな「つながり」や「関係」を捉えるための視点、自らの位置を確認するための視点に他ならない。つまり、地域とは「つながり」や「関係」の織り成す場なのである。だからこそ人の生にとって欠かすことはできないのである¹⁵。

こうしたさまざまな「つながり」や「関係」のなかで今後特に検討すべきは、今回の第2部でもほとんどの報告者が言及しているように、「人と自然との関係」であろう。人は自然とどう向き合ってきたのか、どのような関係を築いてきたのか、それは人の生とどのような関係をもっているのか、という問題である¹⁶。この問題の重要性は大震災を経験して誰もがいま痛感していることではないだろうか。

2011年度「地域学総説」授業計画

■第1部 地域学の視点

- | | | | |
|------|-----|--------|-------------------------|
| 4/13 | 第1回 | 柳原邦光 | 「希望の学としての地域学」〈序章・1章・終章〉 |
| 4/20 | 第2回 | 光多長温 | 「地域主義の系譜と地域学」〈2章(8章)〉 |
| 4/27 | 第3回 | 矢野孝雄 | 「地形から地域を読む」〈7章〉 |
| 5/11 | 第4回 | 仲野 誠 | 「生きられる地域のリアリティ」〈5章〉 |
| 5/18 | 第5回 | 児島 明 | 「人の移動から地域を問う」〈6章〉 |
| 5/25 | 第6回 | 家中 茂 | 「生活のなかから生まれる学問」〈4章〉 |
| 6/3 | 第7回 | 第1部まとめ | |

■第2部 歴史性とつながりの回復

- | | | | |
|------|------|-------|------------------------------------|
| 6/8 | 第8回 | 柳原邦光 | 「なぜ歴史性なのか—フランス史の事例から—」 |
| 6/15 | 第9回 | 岸本 覚 | 「地域意識と歴史性—日本史の事例から—」 |
| 6/22 | 第10回 | 内山 節 | 「『里』(ローカリティ)の思想と歴史性」 |
| 6/29 | 第11回 | 森まゆみ | 「まちの暮らしに生きる歴史をみつめて—『谷根千』の実践から—」 |
| 7/6 | 第12回 | 吉本哲郎 | 「地元学—足元をみつめてつながりを取り戻す—」 |
| 7/13 | 第13回 | 向谷地生良 | 「『自分自身で、共に』つながりを取り戻す—『個人苦』から『世界苦』」 |

¹⁵ 地域学部のホームページでは「地域」と「地域学」を次のように説明している。「人々が生活している空間の広がりとその社会関係、それが『地域』です。この世界は多様な規模と内容からなるさまざまな『地域』が寄り集まってできています。地域を考えることは人類が解決を迫られている多くの課題を考えることに他なりません。既存の学問体系を『地域』の視点から再構成し、地域に存在するさまざまな公共課題の解決を目指す、これが『地域学』です。」http://www.rs.tottori-u.ac.jp/about-gakubu/chiikigaku_policy/index.htm

¹⁶ たとえば、次の文献を参照。内山節『清浄なる精神』、信濃毎日新聞社、2010年、同『共同体の基礎理論—自然と人間の基層から』、農山漁村文化協会、2010年、町田宗鳳『山の霊力』、講談社、2003年。

へー」

7/20 第14回 第2部まとめ（まとめと教員ディスカッション）

■第3部 全体まとめ

7/27 第15回 全体まとめ

○テキスト：『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす』、ミネルヴァ書房、2011年

○公開講座：第10、11、12、13回

講師 内山 節（哲学者）、森まゆみ（作家、市民文化活動家）、吉本哲郎（地元学ネットワーク
主宰）、向谷地生良（ソーシャルワーカー、浦河べてるの家）

（2012年2月3日受付，2012年2月10日受理）